

会員の広場



「一九六五年・ニューヨーク、二〇一七年・
NEW YORK NOW」②

夏目 敏夫（東京）

よく食事に行ったイタリアン・タウンは大部分が韓国人街に、更に中国人街はソーホー地区を席捲していた。チェルシイの食肉工場は、フードセンターとして新スポットに発展した憩いの場、クラムチャウダーが美味いと評判。しかし、T氏が寿司を所望するので、「スシ・バー」に行く。満員の盛況、驚いた事に、経営者はネ

パール人、板前がビルマ人だった。愛想よく楽しめた。しかし、日本食ブームの矛盾、「スシ」が「なまもの」である限り、衛生管理上、将来に危惧を持った。ファースト・フーズも健康指向を売りに「シェイク・シヤック・バーガー」がマックの牙城に迫っていた。一方、ハラール食の屋台が街頭に散見する、目新しい光景には中近東難民の増加か、帰還兵の味覚伝播か、食の形態はグローバル化して居る。

ところで、ナイト・スポットは、先にロックフェラー邸他の公式案内をした、M氏はアイリッシュ系、本業はホテルコンサージ、そのお札にと、ステーキハウスへ行く。草鞋の様な肉塊、山盛り野菜に挑戦したが、皮つきベイクドがマッシュ・ポテトで少々失望。されど、ワインを酌み交わし談論風発、その昔、ヨオコ・オノに日系事務所でコーヒーを出された。その頃は未だジョン・

レノンの女ではなかったと話すと目を丸くした。「ヴィレッジバンガードジャズ」に行く。冴えた金管の音色、ビイトなドラムに酔い痴れた。何れにしても、モルガン・チェイス銀行本部やラトガー大学、ハートフォードのイェール大学図書館、再訪での彼のサポートには感謝々である。他のナイト・スポットは、独りで近くのピアノバアへ行った、「ルート66」をリクエストすると皆、乗ってきた。ジャズ・北野は、日系ホテル内で、観光客や駐在員が多い。ミュージカルは、禁酒法時代の「シカゴ」、名声と自由、スキヤンダラスな人間の欲望をジャズ・リズムに乗せた物語、オーケストラが舞台にある演出が新鮮だ。米倉涼子の出演は翌週とか、ダンサー達との競演、歌と脚線美を見られず残念。さて、最終日は、青い目のトルコ系H氏、大学は日本語科、離婚した日本人妻は、栃木に、15才

男児といえる数奇な人生を語る。IT会社社員である。彼は日本語、私は英語の交換言語で役割分担の一日である。クインズ他、近辺の街区を回る。高級住宅地では、ここに住むのが成功目標と彼は云う。ウッドベリーコモンのアウト・レットへ向かう、二回目だが3倍は大きくなり欧米ブランド店が立ち並び、中国・インド系の人々が奔めいていた。NYメッツの球場、万博跡地も懐かしい。US・ステイルの地球を模したモニュメントを見て、米国鉄鋼業の衰退を、そしてふつと「ヒルビリー・エレジー」のラスト・ベルト地帯を連想した。終りに、僅かの旬日、来たり、見たり、話したりの日々だったがNYはアメリカではない。されど米国そのものでもある。米国を評する、好米、親米、嫌米、反米の知識人達の中には、その言動が何れも当を得ていない、時にはフエイクもあると悟った。